

## パンチョ・ビヤ投獄される

列車がメキシコ市に近づく頃、ビヤは樂觀していた。マデロのために武器を握ったのであり、マデロが彼の忠誠心に報いてくれると信じて疑わなかった。しかし彼の期待は無尽に砕かれた。マデロは彼を釈放する努力を一切しなかった。ビヤを釈放しないよう、マデロは少なくとも三方から圧力を受けていた。それはウエルタ、ウイルソン大使、チワワの支配層であった。ウエルタは強力な敵を作ってしまったことを自覚していた。チワワの支配層と結託してゴンザレス知事を追放する企てを妨害されることを恐れた。ウイルソンはウルピナの一件をビヤの所為にして、マデロにビヤの逮捕を二度にわたって要求したが、マデロは取り合わなかった。ビヤが逮捕された今、ウイルソンはビヤを裁くことにより、ビヤが盗賊で下賤な男に過ぎないことを世に知らしめたかった。このような圧力のもとで、マデロは態度を保留し、かたくなにビヤの嘆願を無視した。<sup>106</sup>

マデロが置かれている状況、特にウイルソンからの圧力がかかっていることなどビヤは知る由もなかった。マデロの弟グスタヴォやアブラム・ゴンザレスはしきりとビヤのために嘆願したが、肝心なマデロが動かない以上ビヤを釈放することは出来なかった。軍の検察側は告訴するに十分な証拠がないことを認めたが、軍は釈放しようとしなかった。1912年5月から9月にかけて、国防相はウエルタの告訴に従って審問を続けたが、十分な証拠固めは出来ず、ビヤは七ヶ月もの間刑務所にいることになった。ウエルタにしてみれば、ビヤを裁いて無罪になれば自分の面子を潰し、信用を失うことになりかねなかった。ビヤを拘束しておけば、いずれマデロが倒れたときには、自分で如何様にでも処分できると考えていた。<sup>107</sup>

告訴された罪状のほとんどは、ビヤがパラルを占領している間に起きたことであった。その当時ビヤは連邦軍ではなく、州政府の権限下にあった。連邦政府官僚の意見では、ビヤはメキシコ軍に属していないため、軍の管轄外であると主張した。逮捕されて数週間後、ビヤは名誉ジェネラルであったゆえ、ジェネラルの給料を要求した。国防相はそのような記録はないこと、そしてビヤにいかなる軍事的役割も与えていない、と回答した。ビヤは軍規によって裁かれる根拠は何もないことを知り、マデロに訴えた。明らかに問題は政治的なもので、ビヤはマデロとゴンザレスにしきりに救いを求めた。<sup>108</sup>

チワワ州知事ゴンザレスはビヤを救うため、あらゆる努力をしたが、残念ながら最終的な権限は全てマデロの手に握られていた。7月11日、ビヤは最初の手紙をマデロ宛に書いた。その中でビヤはひたすらマデロに忠誠であることを強調し、オロスコのように二つの顔は持っていないと書いた。その次の日、彼は再び手紙を書き、自分の苦難などは何でもない事、他人がなんと言おうと自分は忠誠であると言った。7月30日の手紙では、ウエルタがメキシコ市に帰還していることを知り、マデロとウエルタに会わせて欲しいと懇願した。8月の初め、ビヤはマデロから最初の手紙を受け取った。秘書の代筆した冷やや

かな手紙には大統領は面談の要求を受けることが出来ないとした上で、全てが法のもとに裁かれるとだけ述べてあった。それでもビヤはマデロに希望を託して、自分がパラルでオロスコを食い止めた功績を認めて欲しいこと、自分は忠誠であり、一時的に釈放してくれれば、マデロが戦っているサパタとの戦闘に加わることを伝えた。これに対するマデロの回答は前回と同じく何の言質も与えない、冷たいものであった。109

オロスコ軍は6月、パチニバの決戦でウエルタの連邦軍により決定的な打撃を受け、戦闘能力を失い、オロスコは結束力を失った。農業革命を目指すマキシモ・カスティヨはオロスコから離脱して独自で反抗を続け、ある者はアメリカへ逃れてオロスコを批判した。残ったオロスコ兵は小さなグループに分かれてゲリラ戦を展開し、一般市民を襲ったため、オロスコの評判はさらに悪くなった。110

「日墨交流史」は、当時外務書記生であった荒井金太の状況視察報告書について述べている。1912年7月13日、サン・ヘロニモで借地して綿花を栽培していた条勉の農場に、オロスコ軍アルフォンソ・カスタニェダの五百人が現れた。三日にわたり居座り、初日は家宅搜索して金銭と食糧を強奪した。二日目は家畜を殺し、食糧店を荒らし、日本人店員を脅して商品を強奪、その夜には村内の小作人や農夫を家の外に縛りつけ、彼等の妻女を悉く強姦した。条はカスタニェダから掠奪の対象となった物品の代償として一万七千七百十三ペソ七十五セントボスの領収書を受け取った。条勉は宮城県出身、1906年大陸殖民合資八回移民としてオハケーニャに入った。数ヶ月で其処から離れ、チワワ州に移り、一時ラス・プロモサス鉱山に入ったが、一年余りで切り上げ、チワワ市内に食料品店を開いた。1911年にはメキシコ人アルベルト・チャヴェスから年間借地料六千ペソの契約で四千三百平方メートルの土地を借りていた。111

八月、オロスコ軍最後の拠点フアレス市が連邦軍の手に渡り、オロスコはエルパソへ逃れた。敗れたのはオロスコのみで、チワワの支配層は連邦軍を味方にして、オロスコがやろうとして果たせなかったゴンザレス追放に取り掛かった。マデロはさすがに革命時代の友であり同志であったゴンザレスを犠牲にはしなかったが、支配層の要求はなんでも取り入れ、ゴンザレスの地位は日に日に危うくなっていった。ルイス・テラサスはオロスコが反乱を起すと同時にアメリカに逃れていた。ゴンザレスが、テラサスはオロスコを援助していることをマデロに報告していたにも拘らず、マデロはルイス・テラサスが帰国出来るよう環境を整えることをゴンザレスに要求した。マデロは連邦軍がチワワに残る事を容認し、元革命軍からなるチワワ州兵に連邦政府の資金を充当することを禁じた。このように絶望的な状況の中、ゴンザレスはビヤの助けが必要であった。一方のマデロは階級の低いビヤを、単なる報酬目当ての傭兵としか考えていなかった。マデロはウエルタを懐柔するためにビヤを犠牲にした。しかし十月、ウエルタ陰謀説が真実味を帯びてくるようになって初めて、マデロはビヤの裁判に介入し、国外追放することを考えた。112

マデロが釈放してくれると信じている間、ビヤは模範囚として振舞った。望みが絶たれたと気付いて、初めて彼は脱獄を考えた。問題だったのは、数ヶ月の間独房に入れられ、他の囚人との接触が全くないことであった。尋問に呼び出されたある日、ビヤは終わってから自分の房に帰るのを拒んだ。多くの看守に向かって、長い間独房に監禁されるのは不当だと訴え、動こうとしなかった。ビヤの取り扱いには気をつけるよう命じられていた彼等は、折れてビヤを自由に動けるようにした。脱走の手助けを求めるなら、信用できる政治犯に限ると考え、二人のサパティスタと親しくなった。そのうちの一人はサパタの重要な相談相手であるヒルダルド・マガーニャであった。ビヤは看守に金を握らせ、幾つかの独房の鍵を手に入れ、二人は看守部屋に隣接する房に入って待機した。看守部屋には誰もいないことになっていた。二人が独房を抜け出し、看守部屋に入ろうとすると、そこに多くの看守がいたため、二人は引き返して房に戻るしかなかった。無計画で無謀であったとして、マガーニャはビヤの誘いには二度と乗らなかった。113

9月15日、メキシコ独立記念日の夜ウエルタはフアレス市のいつもの酒場で飲んでいるとき、彼の将校の前で「もし俺がその気になれば、バスクアル・オロスコと組んで二万七千の兵でメキシコ市へ行き、マデロから大統領を奪う」と豪語した。これを伝え聞いた陸軍相ジェネラル・アンヘル・ガルシア・ペニャはウエルタの指揮権を剥奪したが、その僅か数日後、マデロはウエルタを少将に任命した。114

九月、軍事法廷はビヤの告訴取り下げの嘆願を棄却した。それ以降保守派の間でビヤに対する関心が高まり、ホセ・ボナレス・サンドバルがビヤの弁護団に加わった。ボナレス・サンドバルはポルフィリオ・ディアスの甥で、マデロに対するクーデターを計画しているフェリス・ディアスと深い関わりがあった。ビヤによると、彼は博愛主義者で、金銭は一切要求しなかった。フェリス・ディアスがベラクルースを占領する三週間ほど前、ボナレス・サンドバルは保釈金を積んでビヤの保釈を申請した。成功したらビヤをフェリス・ディアスの反乱に加担させ、消滅寸前のオロスコの反乱を蘇生しようと考えていた。115

十月、マデロは不誠実な噂を度々耳にして、ビクトリアノ・ウエルタをチワワ州連邦軍司令官から外した。その直後ビヤはマデロの秘書サンチェス・アスコナから手紙を受け取った。間もなく公判を開いて決着を付ける、軍の施設への移動についても考慮すると言うものであった。その二日後、マデロはもう一步進めて、ビヤをスペインに送ることを検討していると伝えてきた。しかしマデロの態度は再び急変した。スペイン行きの手紙を書いた日から僅か二日後、マデロは北部の分遣隊長で自分の弟エミリオ・マデロから警告を受けた。チワワではビヤが釈放されるとの噂で持ち切りであること、もしそうなればチワワ全土に壊滅的な結果をもたらす反動が起きるのは必定で、多くの者が合法的な政府を破壊するために武器を取るようになるとの内容であった。マデロから国外追放の話は二度と持ち上がらなかった。116

1912年10月、ディアスの甥フェリス・ディアスの叛乱がベラクルースで起こった。名誉回復のため立ち上がったディアスは三日後に降伏し、彼は連邦軍によって逮捕された。多くのマデロ支持者は処刑を求めたが、マデロは再び支持者と敵の前で失態を犯した。117 フェリス・ディアスはベルナルド・レイェスと同じく軍の刑務所に入れられた。二人は直ぐ結託し、ピヤを逃すと、北方でマデロに大きな問題を引き起こすことになり、その分だけマデロ転覆が楽になると考えた。ボナレス・サンドバルの二度目の介入は十一月、フェリス・ディアスの反乱の火は既に消されていた。マデロが革命に貢献した人々を益々疎外して行くのを見て、生きて出られるのは脱走しかないと思えた。ピヤは考えた。何度か脱走を図ったが、成功する見込みは殆どなかった。彼は刑務所が変わればチャンスはあるだろうと考え、ボナレス・サンドバルに軍刑務所に移動する嘆願書の提出を依頼した。118

何度も提出した嘆願書の中で、この一件のみが認められた。11月、彼は軍の刑務所に移るやいなや脱走の準備を開始した。ピヤは刑務所の管理事務所に所属し、軍事法廷を担当する下級書記官カルロス・ハウレギと親しくなった。ピヤはハウレギに多くの贈物を届け、懇ろに接した。そして脱走の手助けが成功した暁には、高額の報酬を約束した。ハウレギは忠実で信用できる助手となり、窓の鉄棒を切る鋸を持ち込んだ。隣室でフォークソングを歌っている間に、ピヤは鋸を使った。119

12月11日、脱獄の二週間前ピヤはメキシコ市の新聞エル・パイースの記者のインタビューに応じている。そして逃亡二日前、ピヤはマデロ宛に獄中から最後の手紙を書いた。彼の無実を言明し、必要があれば全ての証拠書類を送ることを約束した。釈放されたならばチワワで戦うか、あるいは外国に送られることを望んでいる、と締めくくった。120

クリスマスの日、独房の窓にある全部の鉄棒を切断し終わっていたピヤは、ハウレギが持ち込んだ弁護士が着るようなスーツを着て脱獄した。二人は中庭をゆっくりと歩いて、二人で訴訟事件に関する事を大声で話しながら守衛の前を通り抜け、待たせてあった車に乗り込んだ。ピヤとハウレギはトルッカ駅に乗りつけ、列車で太平洋岸の港マンザニーヨへ向かった。船がマザトランに到着したときには船の士官を買収し、検疫官が乗船する前に船を離れた。マザトランからはさしたる問題も起こらず、エルパソには年明けに到着した。121

ピヤの脱獄に関し、保守派が具体的にどのような手助けをしたのかは定かではない。ピヤがハウレギを買収する金を貰ったのか、あるいはハウレギそのものが保守派の差し回したのか、逃亡用の車を提供したのは誰か、全てが謎に包まれている。彼等は更にピヤがマデロに反対して立ち上がった時には、資金と武器を約束していたと思われる。ピヤはマデロに最後通牒ともとれる手紙を書いた。マデロからの恩赦を受けてチワワに帰ることを願い、もし一月以内にこれが叶わないときには、それ以降いかなる状況となっても自分を味方だと思ふな、と書いた。122

アブラム・ゴンザレスは、チワワ州知事としてピヤのために出来る限りの便宜をはかった。

ビヤの1月20日付けの手紙を読んで、マデロは初めて折れた。2月6日、マデロはゴンザレスに電報を送り、ビヤに関してはゴンザレスの思い通りにする権限を与えると同時に、投獄されていたビヤの古い同僚トマス・ウルピナも釈放した。しかしこれ等が完全に実行に移される前にマデロはウエルタに転覆され、マデロもゴンザレスも共に暗殺された。

123

106. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P166
107. Ibid. P168
108. Ibid. P172
109. Ibid. P173
110. Ibid. P175
111. 日墨協会・日墨交流史編集委員会「日墨交流史」現代企画室、1990, P382
112. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P178
113. Ibid. P179
114. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P265
115. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P180
116. Ibid. P182
117. Enrique Krauze, "Mexico, Biography of Power, a History of Modern Mexico, 1910-1996, 1997, P265
118. Friedrich Katz, "The Life and Times of Pancho Villa", Stanford University Press, 1998, P181
119. Ibid. P183
120. Ibid. P184
121. Ibid. P185
122. Ibid. P187
123. Ibid. P189